

ミキ先生のご教訓

佐伯茂重

武田学園に十九年間奉職し、ミキ先生から「事業の経営とは如何なるものか」、「経営者は如何にあるべきか」について、多くの教えを受けた。それは、言葉に出して理論的に説かれたのではなく、実践を通し身をもって指導されたのである。従って、私の受け取り方に間違いがあるかも知れぬことを、最初にお断り致します。では、どのような教訓を戴いたのか。

一、経営者は、事業に対して命懸けの情熱と使命感を持つこと。

ミキ先生の、学園発展に懸ける情熱は凄まじいものであった。一例を上げれば、四十余年間に亘って、朝は職員と一緒に出勤し夜は八時・九時まで居残り、日曜祭日も一日中出校して、管理に当り事務を整理し想を練られた。勿論夏休みも冬休みもない。まさに全身全霊を捧げた超人的情熱である。しかし、先生には「特別に努力し

ている」との意識は無かったと思う。勤務時間の問題ではなく、熱意の問題であり、必死であり、先生と学園とは一心同体であった。その根底には「教育に生き教育に死す」との、使命感と信念があった。死力を尽くす人間の姿は真に尊く、学園に活力を与え発展の原動力となった。

二、困難に挫けず挑戦し、克服し活用する強靱な精神を持続すること。

人間は困難に出会い克服することによって、逞しく強靱になる。組織体も同様であり、困難な事態の到来は発展のチャンスでもある。そして、経営には困難がつきものであるが、それを次々と乗り越えて進まれる、先生の姿を見せて戴いた。一例を上げよう。広島市と可部町の合併に伴う高校移転の際には、予期しない事態が次々と起り、一時は進退極まった。その他幾多の困難を、不撓不屈の精神で辛抱し創意工夫し打開して、学園の発展に繋いでいかれた。

三、絶えず前進と改革を実行すること。

世の中は、静止することなく動き変化し発展する。従って、事業も絶えず自己改革を進め、社会の変化に適応しニーズに応えなければ衰滅する。先生は、組織の停滞マンネリ化を極力警戒し、終始前進を計られた。即ち、専門学校・高等学校・短期大学・大学・幼稚園・大学院を次々と設立し、学科やコースの増設改組を断行し、校地の拡張・校舎の新増改築・人的組織の拡充整備・施設設備の充実等を実行された。それも、財政困難の中を苦心惨憺し、存続をかけて推進されたのである。

四、金・物・人を活かして使うこと。

先生は、学園から俸給の支給を受けず、生活費は教員・公務員時代の恩給で賄われた。衣食住等の私生活は質

三、学園運営の寛と厳

素を極め、贅沢や快楽とは全く無縁であった。学園の運営についても徹底的に無駄を省き、使用済みの紙類新聞紙・雑誌冊子・ダンボール箱まで金に換え、器具設備の補修等も極力学内の人手を活用された。かくして捻出した金や物は、学園の経営に重点的に使われた。また、できる限りの適材を適所に配置し、責任を持たせ働きをねぎらい、人を活かして使う努力を続けられた。

五、経営戦略を確立し、機を失せず決断すること。

前述の、学校の新設・学科の増設改組・高校移転問題等々、ポイント・ポイントにおける先生の決断は見事なものであった。事業は、時勢の後を追ってでは発展しない。そこで先を読んで一歩進んだ対応を計画すると、如何に綿密に想を練っても、将来の事には読み切れないものが残る。ある程度の賭的要素の存在は事業経営の宿命であり、トップの決断力が強く求められる。そして、根幹にかかわる決断は、思いつきでなく経営戦略に基づいて、機を失なわず行うべきである、と教えられた。

その他、(以下項目のみに止める。)

六、施策に当たっては、事象を分析してポイントを掴み、バランスを失わぬこと。

七、誠実であり、率先垂範すること。

八、広く情報の蒐集に努め、人の話や意見を謙虚に聞くこと。

九、見栄・体裁・面子にこだわらず、良いことは直ちに実行すること。

等々多くの教訓を戴いた。これらは、理論としては誰でも知っており、平凡なものかも知れぬ。しかし、言うは易く行は難し、言葉として聞くのと具体的な実践を見るのでは、その重み深みが全く違う。私にとっては、誠に

尊い体験でありご教訓であった。謹んで厚く御礼申し上げます。